

編輯 後 記

暖冬といわれた今年の冬も、二月に入って寒さが厳しくなり、平年ないし平年以下の寒さになった。この寒さでわれわれ人間だけでなく、動植物も確実に年輪を加えることが出来たものと安心できる。多少のバラツキや変化はあれ、冬季は冬季なりの季節性が明確であることが、多くの生物の共感を得るということだろう。

大学の研究にしても同じことだろう。近年、学問のグルメ指向によって、聞きなれない学問領域が誕生したりするが、そのペースは既存の学問の根幹に依拠せざるをえないように見える。華やかさに惑わされることなく、地道で着実な、しかも新たな領域を開拓する視点を持った研究が、やがてすぐれた成果と評価を受けるにちがいない。

本研究所の研究もそのような成果の積み上げをめざす過程にあるといたい。しかし、その評価はわれわれが早急にすべきものではない。しかし、現田崎所長の下、研究叢書の刊行が継続されているし、今年度は常例の研究会のほか、初めて学外に場を求め、奥三河ビジョンフォーラムとの共催で公開講演会を開催し、当研究所の存在を広く地域社会にも知ってもらう機会にもなった。当研究所の模索的な歩みは知っていただけたら幸いでもある。

最後に長年所員を務められた川越淳二教授と、鈴木泰山教授が辞任されたことをお知らせする。両先生の長年の御健闘の労をねぎらい、今後の御健勝をお祈りする。

(Y. F. 生)

愛知大学総合郷土研究所紀要 第33輯

昭和63年3月15日

〔非売品〕

編輯代表 田崎哲郎

印刷所 富士印刷株式会社
豊橋市前畑町37

発行所 愛知大学総合郷土研究所
豊橋市町畑町